

## 東京高等師範学校附属小訓導水戸部寅松の業績と書 字教育論（2）：資料編

著者	鈴木 貴史
雑誌名	人文科教育研究
号	42
ページ	59-65
発行年	2015-08-18
その他のタイトル	The Theory of Writing Education of Toramatsu Mitobe Vol.2 : Data
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00126254">http://hdl.handle.net/2241/00126254</a>

資料

## 東京高等師範学校附属小訓導水戸部寅松の業績と書字教育論(2)

## ——資料編——

鈴木 貴 史

はじめに

本稿は、大正期の国語科「書キ方」における書字教育論を先導した人物として東京高等師範学校附属小（以下「東京高師附小」）訓導であった水戸部寅松を取り上げ、「(1) 理論編」を補完するための資料を提示することを目的としている。具体的には、水戸部の業績を概観するための資料となる著書、雑誌『教育研究』に掲載された記事のリストを提示する。本稿では、水戸部の書字教育理論だけにとどまらず、水戸部の業績と書字教育理論の全体像を捉えるための基礎資料とすることを企図しているため、『教育研究』における水戸部寅松名義で執筆された記事のタイトルを網羅しており、さらにその内容に応じた分類を試みている。

## 資料1 水戸部寅松 主要著書リスト

No.	書名	著者	出版年	出版社
1	国定教科書準拠 全科教案例及教授要綱	立柄教俊・水戸部寅松	1905 (明治 38) .10	目黒書店
2	小学校教授用 書法及書方教授法	水戸部寅松・本田小一	1913 (大正 2)	目黒書店
3	実際の小学校教授法・上	小泉又一・水戸部寅松	1913 (大正 2)	大日本図書
4	実際の小学校教授法・下	小泉又一・水戸部寅松	1918 (大正 7)	大日本図書
5	書方教授の実際的新主張	水戸部寅松	1921 (大正 10)	大日本学術会
6	實用習字	水戸部寅松述	出版年不明 (大正 10~12年頃と推定)	實業之日本社帝國實業講習會
7	硬筆書法及教授の実際	水戸部寅松	1922 (大正 11)	目黒書店
8	教材精説珠算教授真義	水戸部寅松	1925 (大正 14)	目黒書店
9	書方科教育問答	水戸部寅松	1930 (昭和 5)	厚生閣書店
10	欧洲航路の珍見聞 : 青少年に聴かせたい	水戸部寅松 著.	1930 (昭和 5)	昭々閣書房
11	輓近欧米国民教育詳説	水戸部寅松	1931 (昭和 6) .9	教育同志會
12	毛筆書法及教授之実際	水戸部寅松	1931 (昭和 6) .9	目黒書店
13	書道精説と書方の新指導法	水戸部寅松	1934 (昭和 9)	啓文社書店

資料1は、水戸部の主要な著書のリストである。ここでは、実際に所蔵を確認できたものに限って掲載した。「(1) 理論編」でも述べたように、水戸部は、1902(明治35)年に東京高師附小訓導となった当初、全教科に渡る研究をしていた(No.1, No.3-4)。

その後は、主に「書キ方」教授法に関する著作を多数出版した(No.2, No.5-7, No.9, No.12-13)。とりわけ1921年以降は、硬筆、細字、速書など、水戸部の実用主義的な「書キ方」教授法が確立してきた時期である。さらに、毛筆についても、基本文字、練習文字など効率的に基本点画、間架結構を学習する理論が展開された(No.12)。

No.10およびNo.11は、東京高師附小退職後に欧米の学校教育を視察した後に記されたものである。

資料2 水戸部寅松『教育研究』掲載記事リスト(水戸部寅松名義のものに限る)

No	号	西暦	元号	月	タイトル	分類
1	1	1904	明治 37	4	入学後十五日間の児童取扱方	その他
2	3			6	尋常小学科第一学年 算術教授上の諸問題	算数
3	4			7	尋常小学科第一学年 算術教授上の諸問題(承前)	算数
4	5			8	尋常小学科第一学年 算術教授上の諸問題(承前)	算数
5	6			9	尋常小学科第一学年 算術教授上の諸問題(承前)	算数
6	8			11	連絡せる教授案例(尋常科二学年)	国語
7	10	1905	明治 38	1	尋常小学科第二学年 算術教授上の諸問題(承前)	算数
8	11			2	尋常小学科第二学年 算術教授上の諸問題(承前)	算数
9	17			8	算術の応用問題	算数
10	18			9	算術の応用問題(続)	算数
11	19			10	同学年の児童を二学級以上に分つ場合に優劣をもってするの可否	その他
12	21			12	尋常小学科第三学年 算術教授上の諸問題	算数
13	30	1906	明治 39	9	尋常科における分数教授	算数
14	32			11	読方教授案例	国語
15	33			12	ラッド博士の講義を聴く	海外教育
16	36	1907	明治 40	3	本校における学校と家庭との連絡につきての質問に答ふ	その他
17	39			6	家庭に於ける復習法	その他
18	42			9	小数乗法及除法教授	算数
19	45			12	参観人の質問	その他
20	46	1908	明治 41	1	今後の教育者	その他
21	47			2	除法の初歩教授	算数

22	50			5	分数乗法及び除法教授	算数
23	51			6	高学年の読方教授	国語
24	52			7	高学年の読方教授	国語
25	54			9	高学年の読方教授（続き）	国語
26	55			10	実科教授と教法	その他
27	58	1909	明治 42	1	学校生活の拡張を望む	その他
28	64			7	近思潮自学主義	海外教育
29	65			8	教具の整理に就いて	その他
30	69			12	教育に関する御勅語御本文の教授に就いて	修身
31	78	1910	明治 43	9	書方教授に就きて	国語「書キ方」
32	88	1911	明治 44	7	實際的教授段階	その他
33	89			8	實際的教授段階（承前）	その他
34	90			9	實際的教授段階（承前）	その他
35	94	1912	明治 45	1	再び書方教授に就いて	国語「書キ方」
36	97			4	読本文章の取扱	国語
37	98			5	読本文章の取扱（前号の続き）	国語
38	100			7	初等教育は今の儘でよいだらうか	その他
39	101	1912	大正 1	8	児童身体発達状況調査	体育
40	102			9	修身教授段階と各種教材	修身
41	104			11	修身教授段階と各種教材	修身
42	105			12	運筆練習に就いて	国語「書キ方」
43	106	1913	大正 2	1	細字毛筆教授	国語「書キ方」
44	107			2	細字毛筆教授（つづき）	国語「書キ方」
45	108			3	読方、綴方の連関的取扱の一例	国語
46	109			4	読方、綴方の連関的取扱の一例	国語
47	115			10	書方手本批評の焦点	国語「書キ方」
48	116			11	尋一最初の毛筆書方教授	国語「書キ方」
49	119	1914	大正 3	1	行書教授	国語「書キ方」
50	120			2	諸等数教授の研究	算数
51	130			11	分数教授の研究	算数
52	133	1915	大正 4	2	片仮名数字平仮名の書法	国語「書キ方」
53	135			3	片仮名数字平仮名の書法（つづき）	国語「書キ方」
54	137			5	間架結構の基本練習	国語「書キ方」
55	138			6	体育奨励の効果	体育

56	139			7	新体操実施後の体育状況	体育
57	140			8	算術に於ける事物問題の取扱	算数
58	141			9	算術に於ける事物問題の取扱 (承前)	算数
59	142			10	運算の教授と練習	算数
60	145			12	朗読法教授の研究	国語
61	146	1916	大正 5	1	運筆説明用大筆の作方	国語「書キ方」
62	147			2	範読及び読方練習法	国語
63	150			4	文字語句の徹底的取扱	国語「書キ方」
64	151			5	文字語句の徹底的取扱 (つづき)	国語「書キ方」
65	165	1917	大正 6	5	平仮名書方教授の要訣	国語「書キ方」
66	169			9	書取につきて	国語
67	173			12	韻文の取扱に就いて	国語
68	188	1919	大正 8	3	基本練習文字の再研究	国語「書キ方」
69	195			9	国語読本尋一漢字の書方	国語「書キ方」
70	197			10	国語読本四巻漢字の書方 (前号のつづき)	国語「書キ方」
71	198			11	国語読本四巻漢字の書方 (前号のつづき)	国語「書キ方」
72	201	1920	大正 9	2	教育改造の二点	その他
73	205			4	国語読本三巻漢字の書方	国語「書キ方」
74	206			5	国語読本三巻漢字の書方 (前号のつづき)	国語「書キ方」
75	210			9	『文』に関する論争と其の掃蕩	国語
76	214			11	書方教授細目の編成に就いて	国語「書キ方」
77	222	1921	大正 10	4	計算用具としての珠算の価値	算数
78	223			5	珠算の課程案と基本教材	算数
79	224			6	学校から家庭へ求める連絡	その他
80	228			9	珠算綴材の組織的研究及取扱上の注意	算数
81	229			10	珠算綴材の組織的研究及取扱上の注意 (続き)	算数
82	230			11	珠算綴材の組織的研究及取扱上の注意 (続き)	算数
83	232			12	珠算綴材の組織的研究及取扱上の注意 (続き)	算数
84	233	1922	大正 11	2	珠算一桁割の教材組織 (つづき)	算数
85	237			3	珠算二桁割の教材組織 (つづき)	算数
86	239			4	珠算三桁割の教材組織 (つづき)	算数
87	240			5	珠算四桁割の教材組織 (つづき)	算数
88	241			6	軟近文具の発達と硬筆書方建設の急務	国語「書キ方」
89	242			7	硬筆を加設した書方課程案の研究	国語「書キ方」

90	248			11	速書練習に就いて	国語「書キ方」
91	250	1923	大正 12	1	堆積二百五十巻の「教育研究」をながめて	その他
92	254			3	余の使用する計数器	その他
93	263			10	ドルトンプランの解剖と批判適用（一）	海外教育
94	264			11	ドルトンプランの解剖と批判適用（前号のつづき）	海外教育
95	266			12	ドルトンプランの解剖と批判適用（承前）	海外教育
96	275	1924	大正 13	7	硬筆書方の実施方策	国語「書キ方」
97	276			8	国語学習書の編纂に就いて	国語
98	282	1925	大正 14	1	国民の計算能力養成論	算数
99	283			3	珠算教材取扱の方針	算数
100	290			7	珠算教授の振興	算数
101	301	1926	大正 15	4	新入児童の学級経営	その他
102	304			7	書方教授の疑問に答ふ	国語「書キ方」
103	310	1927	昭和 2	1	書方教授の将来	国語「書キ方」
104	311			2	回顧二十五年	その他
105	312			3	回顧二十五年（承前）	その他
106	344	1929	昭和 4	7	紐育よりの通信	その他
107	350			12	壤太利及び匈牙利の教育	海外教育
108	353	1930	昭和 5	2	伊太利の教育改革	海外教育
109	355			4	英国教育の概見	海外教育
110	356			5	独逸の教育に就いて	海外教育
111	358			6	独逸の教育に就いて（承前）	海外教育
112	359			7	独逸の教育に就いて（承前）	海外教育
113	361			8	独逸の教育に就いて（承前）	海外教育
114	362			9	仏蘭西の教育	海外教育
115	363			10	英国の教育勅語	海外教育
116	364			11	仏蘭西の教育（承前）	海外教育
117	367	1931	昭和 6	1	米国の教育	海外教育
118	368			2	米国の教育	海外教育
119	369			3	米国の教育	海外教育
120	370			4	米国の教育	海外教育
121	371			5	米国の教育	海外教育
122	373			6	欧米教育の鳥瞰	海外教育
123	376			8	欧米の児童	海外教育

124	377			9	欧米の児童	海外教育
125	383	1932	昭和 7	2	欧米に於ける学校教育の転機	海外教育
126	455	1936	昭和 11	10	東京府立工芸 宮武教頭的美談	その他

資料 2 は、東京高師附小において発足した初等教育研究会発行の雑誌『教育研究』に掲載された水戸部寅松名義の論文のリストである。本稿では、水戸部寅松名義で掲載された126編の論文をその内容によって、「国語」、「国語（書キ方）」、「算数」、「体育」、「修身」、「海外教育」、「その他」に分類した。また、資料 2 以外にも『教育研究』には、「天山」または「水戸部天山」名義で、30編ほどのエッセイを定期的に掲載している。

資料 2 について、その分類に応じた内訳を表に示すと資料 3 のようになる。

資料 3 水戸部寅松による『教育研究』掲載記事の内容別分類

	分類	論文数
1	国語（「書キ方」を除く）	15 編
2	国語（書キ方）	28 編
3	算数	31 編
4	体育	3 編
5	修身	3 編
6	海外教育	24 編
7	その他	22 編
	計	126 編

資料 3 によれば、「国語」教育に関するものは43編に上り最も多く、そのうち「書キ方」教育に限定すると28編になる。また、「算数」教育への関心も高かったため、「算数」に関する論文が31編掲載されている。ただし、「算数」の31編のうち、1910(明治43)年以前の論文が18編あり、これらは水戸部が「書キ方」教育の研究に力を注ぎ始める前に書かれたものである。残りの13編はいずれも1921(大正10)年以降に掲載された珠算に関する論文である。

その他の論文としては、「体育」と「修身」については、いずれも1912(大正1)年までのものであり、このことから大正期に入ってから水戸部は、実用主義的な「書キ方」と珠算に傾注していくことが読み取れる。

「海外教育」については、初期には海外の教育学説の紹介などがあるが、19編は、海外視察からの帰国後の1929(昭和4)年以降に各国の事情について記されたものである。また、「その他」については、学級経営にかかわること、家庭教育との連携などの論文がある。

資料 2 および資料 3 の全体を見渡した場合、水戸部の教育および研究の関心に二つの転機を見出すことができる。その一つめは、1910(明治43)年から1912(大正1)年の研究の方向性を「書キ

方」に定めていく時期である。当時は、硬筆よりもまだ毛筆がその理論の中心に据えられていた。

水戸部の転機の二つめは、1921年(大正10)から1923(大正12)年の実用主義が確立してくる時期である。水戸部はここから、実社会で必要とされる珠算の研究、さらに硬筆を中心に据えた書字教育理論を確立していくのである。佐藤(2005b)は1920年代の筆記具の状況について、鉛筆が普及したことを挙げ、鉛筆は、「低廉な国産洋紙による学習ノートの出現と相まって、一九二〇年代には、従前の石盤・石筆に替わって、代表的な学習筆記具の地位を獲得するに至った」と述べている。加えて、1910年代の後半から国産の万年筆の生産が可能になった(佐藤, 2005a)。

最後に、水戸部の実用主義的な書字教育理論が確立してきた要因の一つとして、こうした筆記具の変化があったことも触れておかなければならない。

本研究の一部は、JSPS 科研費(若手研究B:25780486)の助成を受けたものである。

#### 【引用参考文献】

佐藤秀夫(2005a):教育の文化史4 学校の文化. 阿吽社, 京都. pp.187-188.

佐藤秀夫(2005b):教育の文化史4 現代の視座. 阿吽社, 京都. pp.136-137.